

ウフタⅢ遺跡 (大島郡龍郷町赤尾木)

位置と環境

奄美大島北端の笠利半島は陸繋島を呈し、陸繋部は最短幅で約1 km弱と狭く、東側は海岸線と平行して太平洋から吹き上げられて形成された標高約10～20mの小高い砂丘の海岸段丘が南北に延び、砂丘の後背地は西側へ緩やかに傾斜して畑地帯や集落が営まれる平坦地が笠利湾へと続く。本遺跡はこの笠利半島の陸繋部を東西に走る県道万屋～赤尾木線のほぼ中央部にあたる砂丘の後背地、標高約10mの西に傾斜した砂丘上に位置する。

調査の経緯

調査は、県営一般過疎基幹農道整備事業（赤尾木～手広）に伴い、平成7（1995）年10月31日～11月24日にかけて龍郷町教育委員会が実施した。

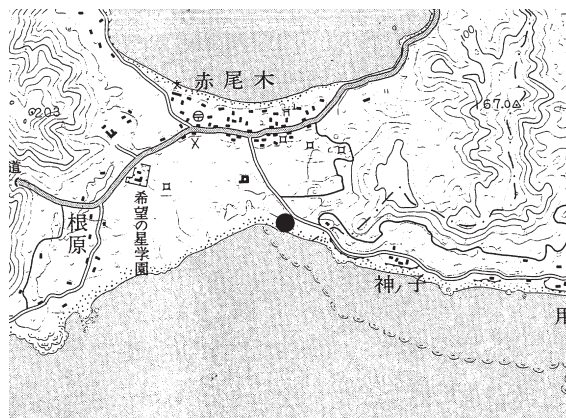
調査の結果、砂丘に形成された縄文時代晩期の貝塚と土坑、弥生時代の石積み石囲い竪穴住居跡1軒が発見された。

調査面積は約300㎡である。

遺構と遺物

遺跡は、東側の海岸段丘の後背地、砂丘の地表下約10mの南に緩やかに傾斜した古砂丘に立地する。

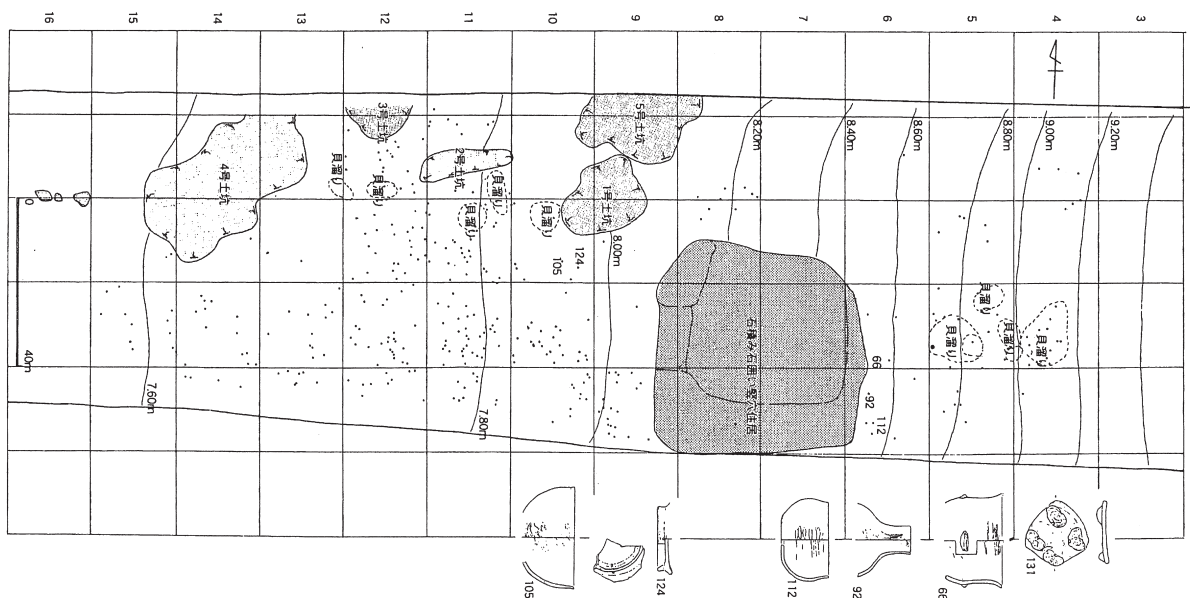
貝塚の範囲は調査区一面に広がり、混土貝層で形成され、堆積は薄く10cm前後である。



第1図 ウフタⅢ遺跡の位置

遺構には不定形の土坑3基が検出された。土坑内からは土器・石器が出土している。混土貝層の貝塚からは深鉢形土器、壺形土器、マリ形土器などを主体に、胴部には小型の突起、紐通しの穴を持つ突起、底部の高台に紐通しの穴4個を持つ突起など特異な土器、本土の縄文晩期のきざみ目突帯文土器、大洞系の土器や剥片石器、石皿、磨石、石斧等の石器、亀の甲羅、魚骨の他、貝小玉、サザエ・ゴホーラ・シャコ貝・二枚貝等、淡水産、海水産、陸産の貝、特記するものとしてジュゴンの骨の先端を尖した長さ24cmの骨角器が出土した。

弥生時代の住居跡は、貝塚を掘り込んで構築した出入り口部・主体部・楕円形遺構・ベッド状遺構からなる多重構造の石積み石囲い竪穴住居跡が発見された。全体の平面プランは約5 m四方の方形である。



第2図 出土遺構・遺物



写真1 石積み石囲い竪穴住居（西側より）

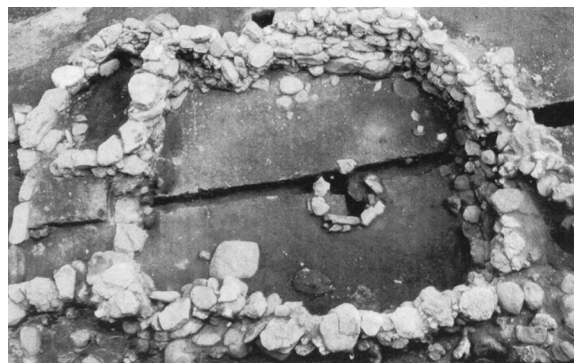


写真2 同左（南側より）



写真3 骨角器出土状況

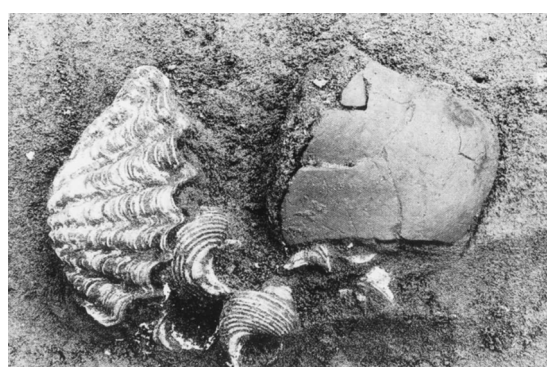
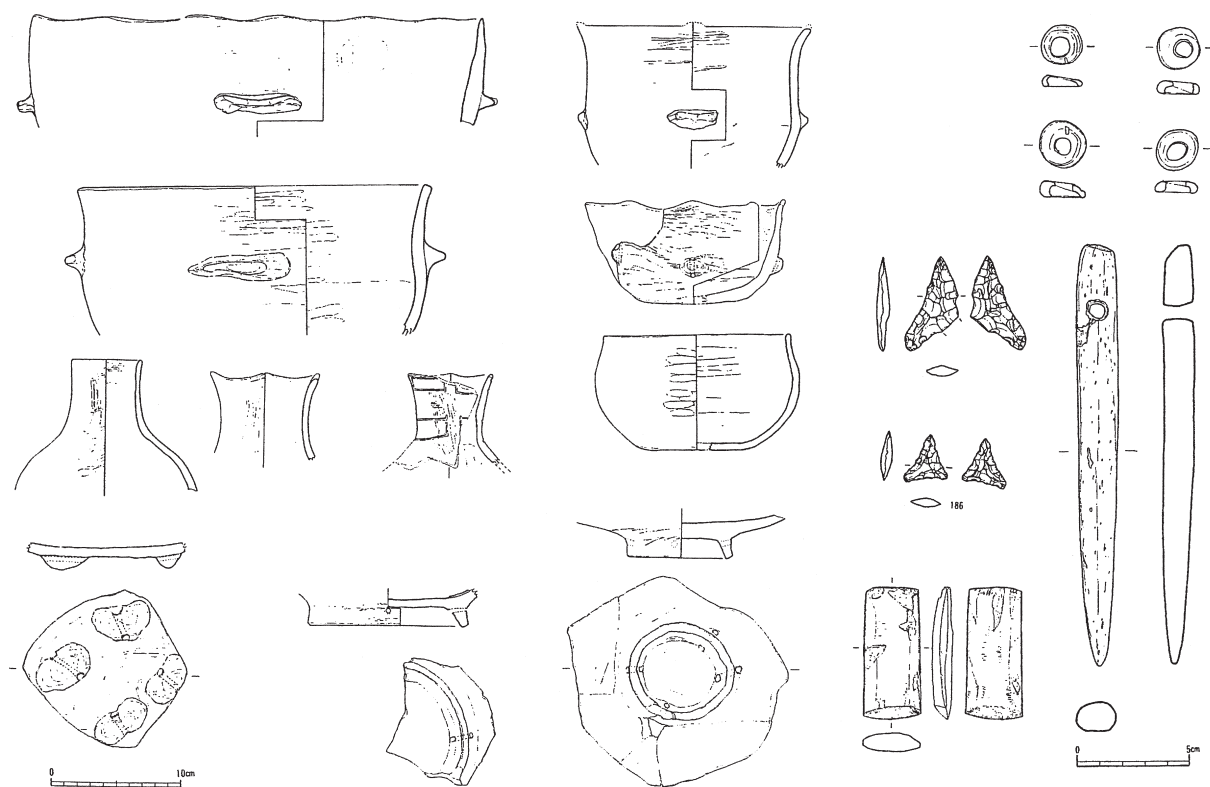
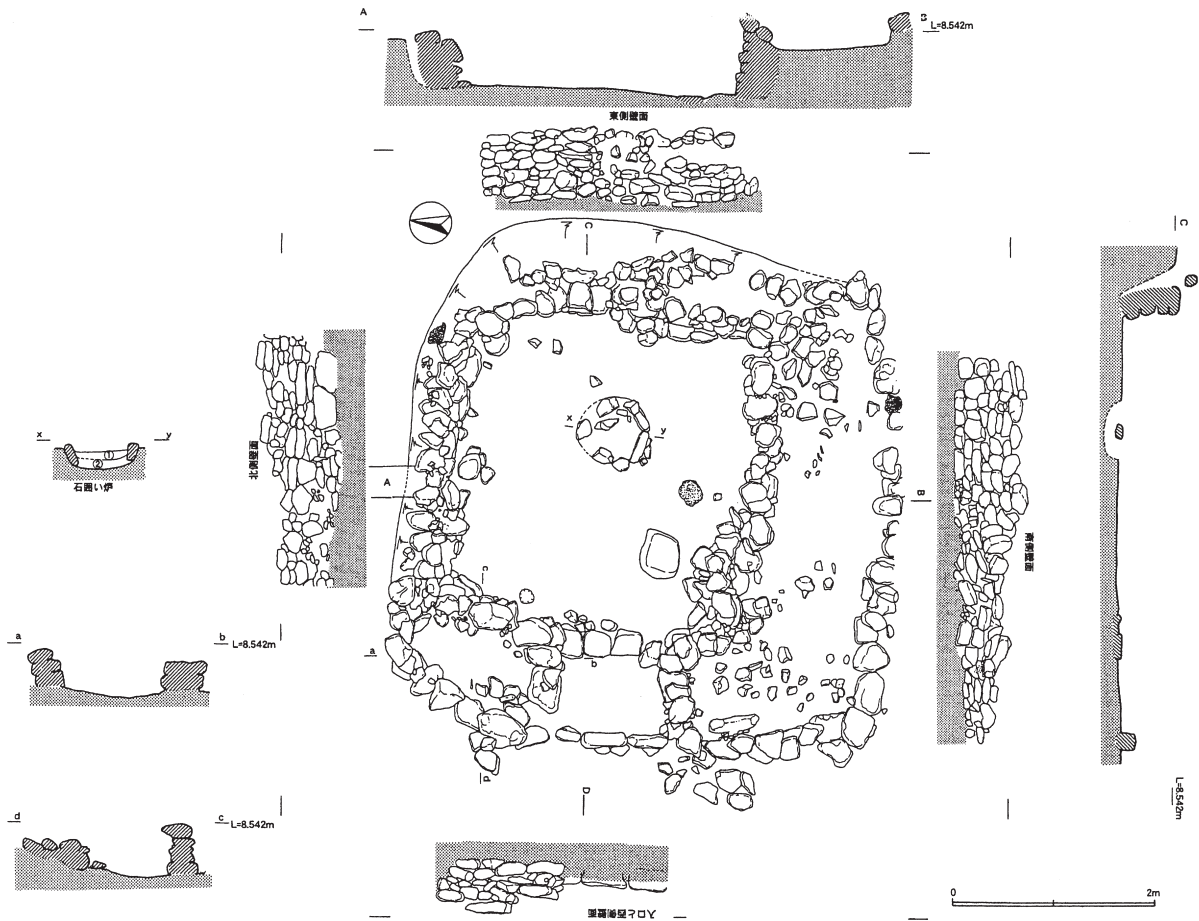


写真4 土器出土状況



第3図 出土遺物



第4図 石積み石囲い竪穴住居跡

西側に開口した出入り口部は幅1m、奥行き1m、住居の主体部である竪穴部は縦横3.3mのほぼ正方形を呈し、壁面の深さは60～70cmで、北・東・西面の壁は面取りした石塊を7～8段に積みあげて壁を造っている。出入り口の西側には深さ60cm、長径1.2m、短径0.6mの楕円形に積み石で囲んだ収納庫（流紋岩製の磨製石斧が底面から一本出土した）、主体部の東側には主体部の床面より約45cm高い縦4.4m、横1mの長方形のベッド状遺構で外縁は人頭大の円礫を一列で配石する。また、住居主体部の床面中央部には5個の石を用いて径約40cm、深さ約30cmの石組炉を設けている。なお、床面のほぼ全体に焼土や灰・炭の散布が見られ、さらに壁面の積み石の表面には火を受け赤色化していることが観察され、この住居は焼失家屋である可能性がある。住居に用いられた積み石は砂岩とサンゴ塊、ビーチロック塊を使用している。

特徴

縄文時代の出土遺物の中に大洞系の土器は特質すべきことである。これまで石囲い住居跡は奄美諸島（笠利町宇宿貝塚、大和村住吉貝塚）や沖縄諸島（与那城町仲原遺跡—国指定史跡）などで発見されているが、本遺跡の多重構造からなる石積み石囲い竪穴住居跡は初めての発見例である。時期的には縄文時代晩期の貝塚に後続するものであるが、貝塚出土の土器の特異性、特殊性もあわせて不明な点が多く、今後の研究課題としたい。

資料の所在

出土遺物は、龍郷町教育委員会に保管されている。

参考文献

龍郷町教育委員会2002「ウフタⅢ遺跡」『龍郷町埋蔵文化財発掘調査報告書』1

（青崎和憲）